「サンタ代行始めました」

2009/12/20

「いいか妹子、頭の悪いお前のために何度だって言ってやるけどな」
「はい」
「サンタさんは、いるんだぞ」
「……はい」

わかった、わかったからもう、そんな涙目で僕を見るのをやめてほしい。
完全に失言だった、と今の僕なら思い知っているからどうか、さっきの発言なかったことにならないだろうか。
反省を通り越して遠い目になってくる僕の前で、太子は唇をとがらせ頬を膨らませ、目に涙を浮かべて。
ああもう、完全に僕はいじめっ子ポジションじゃないか。
あんたは子供かなんかですか、そんな、もうこんな立派にオッサンなくせして。

「いるんだからな」
「……」

事の発端は太子がパーティをしようと言い出したことにあるようなないような。
今日も今日とて通常運行、いつも通りに仕事に取りかかり、定時で仕事を終え、さあ今日もよく頑張ったぞ僕、今夜も冷えるし、家に帰って風呂にでものんびりつかって体がまだあたたかいうちに寝てしまおうと、そんな算段をしている最中。

「よーう妹子ー！」
「う、うげー太子。なんか用ですか？」
「……お前今うげーって言わなかったか？」
「気のせいでしょう。僕早く帰りたいんですけどどうしました？」
「帰るだと？　お前手紙読まなかったのかそれともその上での発言かコノヤローー！！」
「何だとバカヤロウ。手紙？　そんなの見た覚えもないんですけど」
「えーおかしいな……あ、あったあった。なーんだ、まだ出してなかった。はいこれやるよ」

「まだもらってねえんじゃないか！！」
「イブー！」

ばっさばっさと相変わらずこの人のポケットからはなんかよくわからないものが大量に出てくる。
その中から出てきた手紙を突きつけられて、なんか面倒な気がするが仕方がなく、あきらめておとなしく手紙を読んだ。

「……クリスマス？」
「パーティだぞコラうらやましいだろ！　妹子も来いよ」
「他に人いるんですか？」
「それがみんな忙しいって……竹中さんもなんか寒中水泳大会とかぶってるから来れないって言うし……」
「あの人泳げたの！？」
「……あ」

ほんとだどうするんだろ、と首をひねる太子を後目にさてどうしたものかと考える。
考える、ふりをしただけで実はもう答えは出ている。
面倒くさいことこの上ないが、無視をしようとしてもどうせつきまとってくるだろうし、どうせ特に予定なんかなかったし、まあ、僕がいるだけで太子の気がすむならそれでいいのかもしれない。
たった一人でケーキにろうそく立てて吹き消す太子を想像したら同情を禁じ得なかったというか、むしろこっそりとその様子を観察したいような気もするにはしたのだが。
「しかたないですね。で、どこでやるんですかそれ」
太子があんまりにもうれしそうな顔をするものだからなんだかいたたまれなくなって、寒いところはごめんですからね、と付け足した。
ああ、それなら大丈夫、と太子が胸を張る。

「法隆ぢパート2でやるでおま！」
「壊れませんでしたっけあれ」
「あれって言うな！　作り直させたんだよ、ちゃんと！」
「ふーん。で、今回は大丈夫なんですか？　ゆるゆるじゃないですよね？」
「摂政パワーをなめるなよ、大船に乗った気でいんしゃい！！」
「不安だ……」

そんなこんなで連れていかれた法隆ぢ（パート2だとかなんとか）。ふつうに歩いていけばいいのになぜかキャスター付きのイスを豚に引かせるというよくわからない移動手段。特別に二人乗りさせてやってもいいというのは断った。こんな恥ずかしい乗り物にしかも二人乗りなんて誰がするか。のろのろと進むのにあわせてのろのろ歩いた。見上げた夜空の星がすごくて吐き出した息が白く雲みたいに光を霞ませた。

さんざん時間をかけてようやく到着して、前回と全く同じようなたたずまの法隆ぢの居間にはもうすでに、太子の言う通りパーティの用意がしてあった。
入り口脇には堂々としたたたずまいの電飾で飾られた木がひとつ。てっぺんに飾ってあるのは……よく見なくても大きなアイスの棒だったりして。コタツの上にはカレーとかピザとかフライドチキンとかケーキとか、いかにも太子が好きそうなパーティらしいメニューがずらり並ぶ。クラッカーとかもちゃんとある。サンタ帽とかヒゲとか紙製のとんがり帽子とか。
やっぱり断ってこっそり後をつけて、ここで一人さみしくしてるところを観察した方が楽しかったかもしれない。
惜しいことをしたなあと考えているのにはきっと気づかれていない。手を引かれてコタツに入り、飲み物を用意させられたりしつつ二人で食べられるだけ食べた。ケーキとか、これ何人分だよっていう大きさで残りはまた明日にでもとあきらめたりして。
食事の後にはクラッカーを無駄に破裂させつつ、腹がきつくて動くのが辛く、それは太子も同じようで暴れるのもいつもに比べて控えめで、結局二人でうなりながらだらだらした。だらだらしながらの言い合いで、僕は今夜はここに、枕投げをしないという約束で泊まっていくことに決まってしまった。
ひたすらだらだらしてごろごろして、もうこのまま寝てしまうか、だったら布団を敷かないと、ということになって当然のように僕が用意させられて、いざ眠ろう、となった時だった。
いそいそと太子が、ツリーに靴下をぶら下げだしたのは。
「なんですかそれ」
「んー？　なぁんだ妹子、知らないのか？」
鼻歌交じりに機嫌良く、太子が言ったのだ。
「こうしとくとな、サンタさんがプレゼント持ってきてくれるんだぞ！」
「……え」
だってあれ、迷信でしょう、と。
言ってしまったのだ、僕が。
……それで、このやりとりに至る。

太子は正座している。僕も正座させられている。
ふたりして膝をつきあわせて、話すことがサンタさん、だ。
もとは僕が悪いとはいえ、申し訳なさを通り越して呆れが入り、最終的に悟りの段階に入りそうになっている。

だってまだサンタを信じてるヤツがいるなんて思わなかったんだ。まだというか、あれは完全な夢物語としての話かと思ってた。
だからまさか、信じてるやつがいるだなんて。
しかもこんな身近なところに。

「……寝る」
「え？」
「早く寝ないと、よい子じゃないと、サンタさん来ない」
太子は僕に背を向けてさっさと布団に潜り込んでしまった。
頭の上までかけ布団を引っ張りあげて、すっぽりと。
「あの、たいし？」
「休み！」
ああもうこれはだめだな、思って、僕は途方に暮れた。
どうすんだよ、と八つ当たり気味の思考も持て余して一人情けなく正座したまま、とりあえず電気を消してやろうと思いついてようやく動くことができた。
かち、かち、と紐を二回引いて明かりは豆電球のみになり、部屋は暗くなる。
背中を丸めて壁を向いたまま、もうぴくりとも動かない太子に気付かれないようなため息をついた。

「どうしろっていうんだよ……」
サンタさん。……サンタさん？
そんなもん、いるもんか。
僕は悪くないんだと、何回か胸の内で繰り返してみる。
ダメだった。
太子の涙目が思い出されて、罪悪感が重たくのしかかってくる。
それではどう太子に謝るべきなのか、延々と考えているうちに聞こえてきたのは規則正しい呼吸の音。
僕は思い悩むのも何だか馬鹿馬鹿しくなってきてしまって、開き直って布団にもぐりこんだ。
太子は悪くない。でも、僕だってきっと悪くはないのだ。
太子は眠ってしまったのだから、僕が寝たってかまわないだろう。
そう、思うのに、眠気はいつまでたってもやってこなかった。

ふ、と意識が覚醒して、それで今まで自分が眠っていたことに気付く。

暗闇の中ぱちりと目を開けて、それから一気に全身が緊張した。
誰か、いる。
誰か、何か、何者かの気配を感じる。
その気配によって目が覚めたのだと遅れて気付く。
ひた、ひた、と何かが足元の方、部屋の入り口の方にいる。
いる、気がする。
耳を澄ます。いびき交じりの呼吸の音はきっと隣で寝ている太子。
太子はまだ気付いていない。無防備にも眠っている。
どうするべきか、迷った。
ただの物盗りだったらこのまま眠ったふりを続けた方が賢明だろう。どうせここには僕のものなど何もない。困ることは何一つない。
でももしも、狙いが太子自身だとしたら？
こんなヤツでも貴族なのだと、政を掌握する立場にいるのだと再認識する。
ありえない話ではなく、そしてここには、僕しかいない。
守れるのは僕しかいない。
そう思ったらもう、身体は動いていた。
一度目をきつく瞑り、細く息を吐き出し、吸い込む。
目を開くのと同時に、布団を跳ね除けて飛び起きた。
「誰だっ！？」
押し殺した声で鋭く言い放つ。
そして思ったとおりの場所に、やたらと堂々として大きなアイスの棒の飾られた木に手を伸ばした姿勢でぴたりと固まり、
「イナフ？」
そう、心底不思議そうに呟いたその人の、特徴的な後頭部には見覚えがあった。
「え？　……あれ、なんで……」
「イナフこそ、どうしてここにいるんだ？」
二人して何となく見つめあって、おんなじ角度で首を傾げてしまった。
「……じゃあ、つまり竹中さんは……」
「サンタさんだ」
今夜だけ、太子専属のな。
と、白い息を吐きながらからりと竹中さんが笑っていた。

溶けていくその白を見ながら僕は、ああ、この人にも体温があるんだなんて、なんだか失礼なことを考えていたのに竹中さんはおだやかに笑んだままだった。たまに後頭部の尾ひれのせいでどうにもうまくかぶれていない、赤白の帽子の位置を直していた。

はあ、と吐き出す僕の息も同じく、白い。

寝ている太子が起き出すとは思えなかったが、一応気をつかって話をするため、二人で外に出たのだった。黒い空に星の光が鋭くて、寒さでかその光の強さのせいか、ずっと見上げているとじわり涙が滲む感覚があった。

「あの子がめずらしく言ったわがままだったから」

深く微笑む声は、そう、海辺の音にどこか似ている。寄せては返す波の音。意識しないと気付かない、波打ち際の海の声。

少し違うのは、竹中さんの声はそうと意識しなくともはっきりと、太子への思いが見えることだろうか。

思い知らされるのは、いつでも太子は、この人に大切にされているということだ。

「だからずっと、そのわがままを叶えているつもりではあるんだが」

もうそろそろ、気付かれてしまっているのかもしれないね、と竹中さんは最後は独り言のように、口の中だけで呟いていた。

僕は僕で涙目の太子を思い出して、その頑なな様子の理由が見えてしまう。

脱力感に思わずしゃがみ込みそうになるのをどうにか踏ん張って、そうだったんですね、と努めて落ち着いた声を返した。

空を見上げたままだったのは、こんな顔、竹中さんにだって見られたくなかったからだ。

正確にはどんな顔してんのかなんて、僕自身だって良くわからないけれども。

でもきっと、少なくとも情けない顔であることは間違いないはずだ。

つまり、こういうことなのだ、と。

はあ、とも一度息を白く吐き出して、思う。

――つまりサンタの正体は、二人の約束であるのだ、と。

首が疲れて視線を戻せば、まあそういうわけなんだ、と竹中さんが笑う。

僕はもうどう言ったらいいのかわからなくなって、ただ、僕の否定がどう太子に聞こえていたのか、それを想像して舌打ちをした。

僕は馬鹿だ。

あのとき僕が否定したのは、サンタの存在なんていうもの

ではない。
きっと太子と、そして竹中さんにとってもっと、大切な。

「竹中さん、ひとつ、お願いしてもいいですか？」
「ん？　なんだい？」

どうしたら太子に謝ることができるのだろうかと考えていた。
ようやく思いついたものだってけして冴えたやり方なんてものではなくて、それでもしないよりは、ましだと思えたから。

少し出かけてくるからここで待っていてほしいのだと。
告げると、少し考えるような間の後に、

「うん」

行ってらっしゃい、という声に背中を押されて、僕は走り出した。

謝り方なんか知らない。

でもきっと太子は悪くなくって、僕は、知らないうちに太子の大切な物を傷つけた。
僕だって悪くない、そんなこと、僕の知ったことではない。
でも謝りたいと思ったから。
僕は。

わあ、とかひゃあ、とかまあ、そういうたぐいの、言葉になっていない奇声に起こされた。
薄く目を開けたら部屋の中はすっかり明るくて、ああくそ、眠い、毒付いてもぞりと再び布団に潜り込んだものの、目を覚ましたのは太子にばれてしまった。

「妹子！　ちょっと起きろってほらこれ見ろよ！」
「……もうぅー、何ですかうっとうしい……」
「プレゼントだ！」

がばり、と掛け布団をはがれて身震いした。腕をつかまれて引っ張られても抵抗していると、今度は背中を押されて強制的に上半身を起こさせられた。

僕、まだ眠いんですけれどもね。
無視かよ。
「サンタさんだよ！」
目の前に突きつけられたのはにぎやかな柄の包みのプレゼントだった。
太子の声は僕の機嫌とは無関係に、朝っぱらからテンション高く弾んでいる。
「しかも聞いて驚けよ妹子、なんと、今年は二つきたんだぞ！！」
「……へえ」
目をぐりぐりこすりながら答える。
「それ、かたっぽ、僕のだったりしないんですか？」
「え」
ぴたりと、太子が固まった。
その様子があまりにもおおもしろくて僕は、眠かったことも忘れてひとしきり笑った。
「え、ちょ、マジかよ！　何でお前のところにもサンタさんくるんだよおかしいだろ！？」
「ほら、僕、よい子じゃないですか」
「嘘だ！」
「少なくともあんたよか真面目に仕事してるよ！！」
があん、とあからさまにショック受けました、という表情で打ちひしがれる太子にまた、笑って。
「冗談ですよ」
知らないんですかサンタって家ごとにくるんですよ。だから僕宛のプレゼントは僕んちにくるんです。
それはちゃんと、太子の物ですよ。
「び、びっくりさせんな！！」
それからがさがさと乱暴に包みを開け出す太子を見て、ああもうもっと丁寧にできないのかと思いながらひとつ、あくびをした。

僕だって悪くない、太子と竹中さんのわがままだとか約束だとか、そんなの僕の知ったことではない。
でも謝りたいと思ったから。
僕は、今年のクリスマスは太子の信じているという“サン

タさん”、に譲ろうと思った。
お陰で僕は太子に贈る物を何も持っていないが、まあ、どうにかなるだろう。

「あれ？」
「何ですか。人の顔そんなじろじろ見んな」
「だってなんか、」

妹子、笑ってる？　そう呟いた太子にあんたの顔がおかしいからだよと言い返しても、表情がゆるんでしまうのをおさえるのは難しい。
良かったな、と、口で言えば良かったのにそれだけのことを変に照れくさく感じてしまって僕は、結局何も言わずにがしがいと太子の頭をなでくりまわしながら、あくびで眠たいふりを続けていた。

「サンタにまつわる
いくつかの話」

2009/12/31

◇子供じみたわがままひとつ（太子と竹中さん）

「竹中さんは、“サンタさん”って知ってるか？」

わからなかった私が首を傾げてみせることでそれに答えると、太子は、うれしそうに話を始めた。

私に何かを教えられることがとても楽しい、そんな様子だった。そんなことをついこの前太子が言っていた。私はいつも太子から教えられることばかりだったから不思議に思ってそう伝えると、逆に心底不思議そうな顔をしていたっけ。

“サンタさん”はな、よい子の味方なんだ！」

太子は本当に楽しそうに、いろいろなことを教えてくれた。“サンタさん”は赤と白の服を着ているのだとか、どんな家にでも忍び込むことができるだとか、一年に一日だけしか仕事をしないんだとか。いろいろなことを。

そして最後に、よい子のところにプレゼントをおいてくれるんだ、と。

そこまでを一気に話して、ふと、太子が口をつぐんだ。

少しだけ視線を下に落として、ため息でも吐き出すようにぽつり呟く。

「でも私のところには、来たことがない」

きっと私は、よい子ではないんだよな。そんなことを言って、こちらを見て、笑う。

今までが嘘みたいに、ひびだらけの笑顔だった。

これを壊したら何が表に現れるのだろうかと私は考える。

幼い人間の頭にそっと、手のひらをのせて髪をすくようになでてあげながら、考える。

ひびの隙間からにじむもの。それをわかってやれる仲間がこれから先、この子の元に現れるのだろうか。そんな人間がいるとして、その者は今、何をしているのだろうか。

こんなにも壊れてしまいそうなこの子を放って何をしているのだろう。

力になりたいと思う。私はこの子供が好きで、守りたい。

けれどもこの子をわかってやるのは、自分の役目ではないのだと知っている。

だから甘やかして大切にして、せめてこの子をわかってや

れる者が現れるまで、この子が壊れてしまわないように、ひびの隙間を埋めるように優しさを塗り込めていくことしかできない。
その場しのぎにしかならないことだってきちんと、わかってはいたけれど。
「よい子になりたいなあ……」
抱きしめたい、とうずく指先を持て余す。
これで我慢しなさいとたしなめるように私は、ゆっくりと太子の頭をなでていた。

◇嘘ひとつ（竹中さんと妹子）

「そういえば竹中さん、今日は寒中水泳大会があったって」
「ああ、すまない、それは嘘だ」
（ああなんだ、嘘だったんだ）
「パーティは楽しそうだけど、太子といっしょだとプレゼントがおけないから」
「……そうだったんですね」
「あとは太子がイナフといっしょに過ごしたがってたから、邪魔をしたら悪いと思って」
「……はあ！？」
「どうしたイナフ。墨汁の海に溺れたような顔をして。風邪か？」
「どんな顔ですかそれ！　何でそれで風邪なんですか！？」
「この時期いくら墨汁とは言え泳げばさすがに寒いだろう」
（どうしよう、真面目な顔で言われるとどう返したらいいかわからないし、そもそも竹中さんに全力で突っ込みを入れてもいいものかどうかわからなくなってきた）

◇しかたないからわけてあげる（妹子と太子）

がさがさと包みを引きちぎったせいでまわり中紙屑だらけだ。くそ、誰が掃除すると思ってんだ。僕だ。なぜか。
ゴミ箱を探してきて片っ端から捨ててやる。
「おおおおおっ」

竹中さんの包みからでてきたのは……なんだろあれ。よくわからない。置物に見えるけど。

「うわ、すごい、ほしかったんだ！！」

だから、何だよ！！

突っ込みは飲み込んでおいた。また変な地雷を不用意に踏むことは避けたかった。

そしてもう一つの包みから出てきたのは、まあ、わかりきってはいたけれどもマフラーだ。濃い桃色の。

「おおお、もっふもふ。ほら見ろ妹子、もっふもふ」

「あーはいはいわかりましたよもう。……顔に押しつけてくんな！」

「うおー、おどろき新触感！」

はしゃぐ太子を見ていると何となく気が抜けてくる。

ため息を吐いて、紙屑の片づけも終えてぼけっと座り込んでいると、太子がそばに寄ってきた。

「……なんですか。何するんですか」

「大人しくしてろよー」

太子はマフラーをくるりと僕の首に一巻きする。

そしてまだ余った部分を太子は自分の首に巻いたのだった。

太子はそれから、背中合わせになるように僕の後ろに座り込む。

「もっふもふ。首もっふもふ」

「……部屋ん中であっついです。ひっつくなうっとうしい」

「サンタさんのプレゼント、お前にも分けてあげてるんだよ。もっと有り難がれ、この」

お互いの背中を背もたれに、部屋の中なのにマフラー巻いて、ふたりしてただぼんやりと座り込んでいた。

「太子ー。仕事はー？」

「お前こそ」

顔は見えなくてどんな顔してんのかわかんなくて。

でも手探りで見つけた手のひらをつかんで、まあいいかって、思った。